国際日本研究センター
International Center for Japanese Studies

NEWS LETTER
ニューズレター
東京外国語大学
Tokyo University for Foreign Studies
http://www.tufs.ac.jp/common/icjs
2014.10 No.15

・夏季セミナー2014・大学院生サマースクール報告　Summer Seminar 2014 Report …… P1
・「クラクフにおける日本のふるさと」国際シンポジウム、ポスター展
International Symposium and Poster Exhibition“Japanese Home in Krakow” …… P1-P2
・「日台体験型交流活動を通じた学びとは」ワークショップ報告
Workshop Report “Learning from Japan-Taiwan Cultural Exchange” …… P3
・特任研究員ワークショップ　Special Researcher's Workshop …… P4
・活動報告(2014年6月～9月)　Activity Report (Jun. - Sep. 2014) …… P4

夏季セミナー2014・大学院生サマースクール報告　2014年7月29日～8月1日
Summer Seminar, PhD Students Workshop 2014 Report

7月29日～8月1日にわたって、夏季セミナー2014「言語・文学・社会」が開催された。またこれにあわせて、国内外の大学院生の研究発表会であるサマースクールも開催された。

夏季セミナーは2012年から始まり、今年が3回目である。今回はゲスト講師として金鍾徳氏（韓国外国語大学校）、蕭幸君氏（台湾東海大学）、任榮哲氏（韓国中央大学校）、タサニー・メーターピスィット氏（タマサート大学）、笵淑文氏（国立台湾大学）、徐一平氏（北京外国語大学）、林明珠氏（シンガポール国立大学）、趙華敏氏（北京大学）、于乃明氏（国立政治大学）の各氏。また本学からは村尾誠一氏、早津恵美子氏、高垣敏博氏、谷和明氏、野本京子氏、谷口龍子氏の各教員が講義を担当した。それぞれ言語、文学、社会（教育・歴史も含む）各分野から、現在進行している研究テーマについて、刺激にあふれた講義が行われた。4日間ののべ参加者数は約480名であった。

国内外の大学院生の研究発表会であるサマースクールは昨年から開始されたが、今回は47名の大学院生が参加した。このうちアジアの各大学からは16名、国内からは本学学生のほかに、筑波大学、東京学芸大学、国際基督教大学から5名の参加があった。サマースクールは研究領域に応じて4つの教室に分けて行われ、教員によるコメントや助言を含む質疑応答が熱心に交わされた。終了後、アジアから参加した大学院生には、「サマースクール修了証」が発行された。また今回の夏季セミナー・サマースクールは大学院博士前期課程の集中講義「国際日本研究入門Ⅰ・Ⅱ」としても開講された。

さらにサマースクールにあわせて、7月27日、28日、8月2日に、海外から参加した院生を対象としたスタディ・ツアーも開催され、江戸東京博物館、多磨霊園、江戸東京たてもの園などの都内の文化施設や旧蹟を訪ねた。

サマースクール終了後の7月31日には、円形食堂において院生懇親会が、立石学長、海外の院生のホームステイに協力いただいた関係者の方々の参加も得て、盛大に開催された。さらに8月1日は午後からジャーナル国際編集顧問会議が開催され、ジャーナル発行に関する議事のほかに、夏季セミナーについての意見交換も行われた。

夏季セミナーの各講義はセンターのHPで見ることができる。また、大学院生の研究発表の要旨は国際日本研究センターのジャーナル第5号（2015年3月発行予定）に掲載される。

（友常勉）

The Summer Seminar 2014 ran from July 29th to August 1st. A Summer School was held at the same time, to give graduate students from home and abroad the opportunity to present their research. Around 480 people participated during the seminar. Launched in 2012 and now in the third year, the Summer Seminars showcased detailed and stimulating lectures on current research in the fields of language, literature and society, as well as education and history. The Summer School for graduate students, established last year, attracted 47 participants. Alongside TUFS students were 16 attendees from universities across Asia, and another 5 from Tsukuba University, Tokyo GakugeiUniversity and International Christian University. Both events were accompanied by lively question and answer sessions.

(Tsutomu TOMOTSUNE)

「クラクフにおける日本のふるさと」国際シンポジウム、ポスター展 開催迫る
International Symposium and Poster Exhibition “Japanese Home in Krakow”

本学ポーランド語科准教授の森田耕司氏に寄稿をお願いしました。

東京外国語大学2014年「V4＋日本」交流年事業実行委員会及び国際日本研究センターは、外務省の2014年「V4＋日本」交流年事業の一環として、ポーランド共和国の古都クラクフにある日本美術技術博物館manggha開館20周年を記念した国際シンポジウムとポスター展「クラクフにおける日本のふるさと－日本美術技術博物館mangghaの20年」を開催いたします。ちなみに、V4とは「ヴィシェグラード4カ国（ポーランド、チェコ、スロヴァキア、ハンガリー）による地域協力機構」を意味します。2014年10月15日（水）開催予定の国際シンポジウムではボグナ・ジェフチャルク＝マイ氏（日本美術技術博物館mangghaの館長）、カタジナ・ノヴァク氏（同副館長）、加須屋明子氏（京都市立芸術大学准教授）、スタニスワフ・メイエル氏（ヤギェロン大学准教授／東京外国語大学国際

日本研究センター特任研究員）に、この博物館の20年にわたる歴史やポスターの特徴とその魅力、そして同じクラクフにあるヤギェロン大学日本学科との協力関係についての発表及びディスカッションが予定されており、シンポジウム全体の司会とコメンテーター及びディスカッションのモデレーターは、森田耕司（東京外国語大学准教授）が担当する予定です。2014年10月15日（水）～ 11月14日（金）開催予定のポスター展では、日本との交流の拠点としてポーランドはもとより中東欧における中心的存在として認知されている日本美術技術博物館manggha で開催された日本関連の様々な企画や催しのポスターのなかから厳選された約40点を展示することにより、この博物館の20年の歴史を振り返ります。

両国の友情の象徴でもある博物館がこれまでにたどった歴史の一面を、国際シンポジウムとポスター展を通して、この機会に是非ご覧ください。

This report was contributed by Prof. Koji MORITA, Polish Linguistics, TUFS. This year the Manggha Museum of Japanese Art and Technology, in Poland's former capital Krakow, celebrates its twentieth anniversary. To mark the occasion, the Tokyo University of Foreign Studies "2014: Year of Exchange for V4 plus Japan" Executive Committee and the International Center for Japanese Studies are to hold an international symposium and accompanying ***poster exhibition entitled "Japanese Home in Krakow"***. "V4" stands for the Visegrad Group, a regional alliance between Poland, the Czech Republic, Slovakia and Hungary. The symposium will take place on Wednesday, October 15th, with the poster exhibition running from then until Friday, November 14th. On display will be a selection of posters from a variety of past events hosted by the Manggha Museum of Japanese Art and Technology.

「日台体験型交流活動を通じた学びとは」ワークショップ報告
Workshop Report "Learning from Japan-Taiwan Cultural Exchange"

国際日本語教育部門　主催「日台体験型交流活動を通じた学びとは」ワークショップ：母語・地域性をふまえた日本語教育研究発表者：文野峯子氏（人間環境大学名誉教授）工藤節子氏（（台湾）東海大学助理教授2014年9月8日（月）15:00-17:30場所：東京外国語大学府中キャンパス　研究講義棟1階104室　豊橋の人間環境大学と台湾の東海大学では、日本と台湾の大学生がコミュニケーションを取ることで問題解決をしてゆく場が組み込まれた合宿形式の活動が行われ、今年で９年目を迎える。本ワークショップはこのような活動から学生がどのようなことを学べるのかという問いをフロアに投げかけ、参加者を交えてディスカッションを行うことが趣旨である。ワークショップでは、初めにこれまでの交流活動の内容が紹介された。学生自身で交流活動への参加を呼びかけるコマーシャル・フィルムの作成、農業体験への参加風景や参加した学生へのインタビューなどが紹介された後で、上記に挙げた問いについて、ディスカッションが行われた。ディスカッションはグループごとにキーワードを書き出しながら行われ、その後書き出したメモを見せながら発表が行われた。最後に、交流活動に参加した学生へのインタビューの結果がPAC分析によるテンドログラムで示された。

こういった学生主体のプロジェクトワークは、言語教育に限らず、他者とのコミュニケーション能力、共同作業、国際交流といった複数の体験実践や問題解決能力の向上を養う方法として、近年多くの教育機関で実践されつつある。しかし、活動内容の分析や実質的効果の精査はあまり行われていないのが現状であろう。今後の学部教育においてこのような学生主体の活動は一層活発になると思われるが、教員の役割も含めて運営やプログラムの効果を検討する必要があり、その点、多くの示唆が与えられたワークショップであった。夏休み中にも関わらず会場には３０人近くの教員や学生が参加し、熱心な討論となった。（谷口龍子）

工藤氏（左）、文野氏（右）

Sep.8th, 2014 Lecturers: Mineko BUNNO,University of Human Environments, Japan and Setsuko KUDO,Tunghai University, Taiwan, The fifth workshop of the "Japanese Language education tailored to local languages and cultures' Mother Tongue and Locality" project, entitled "Learning from Japan-Taiwan cultural exchange", was organized and hosted by the International Japanese Education Division of the International Center for Japanese Studies, Tokyo University of Foreign Studies. Speakers are Mineko BUNNO,University of Human Environments, Japan and Setsuko KUDO,Tunghai University, Taiwan, and its held at Room 104, Research and Lecture Building, TUFS Fuchu Campus on September 8th. 2014 marks the ninth year of the camp jointly organized by the University of Human Environments and Tunghai University, focusing on problem solving through student exchange. The workshop began with an introduction of past exchanges, in which students experienced agricultural life and produced their own commercial promoting cultural exchange. The speakers then joined the audience of thirty in lively group discussions about the benefits for participating students besides improving their Japanese. Each group noted down keywords and then presented their findings. Finally, the results of a PAC analysis of interviews with students who had participated in the camp were presented in the form of diagrams. Student-focused projects are becoming an important means of enhancing not only language education, but also international exchanges, by improving students'communicative and cooperative skills. (Ryuko TANIGUCHI)

『外国語と日本語との対照言語学的研究』第13回研究会
"Contrastive Study for Japanese and Other Languages" the 13th Research Seminar

日　時：2014年7月13日（土）14:00-17:30
場　所：東京外国語大学語学研究所（研究講義棟4階419室）
発表者・講演者と題目
川口裕司（東京外国語大学）発表「フランス語の否定辞—通時的分析のために—」
大矢俊明（筑波大学）講演「受動と使役～bekommen 'get' とfree dative～」
風間伸次郎（東京外国語大学）「言語類型論からみた日本語—日本語は本当に従属部表示型の言語なのか？」

最初に本学の川口裕司氏による「フランス語の否定辞—通時的分析のために—」と題する発表が行われた。川口氏の発表は、フランス語の否定辞の通時的変化について考察したものである。古フランス語における否定辞の文法化の実態を、その文法化の段階ごとに、実例に基づき

明らかにしている。それによると、最古フランス語の否定辞は"non""ne"などだけの単純な否定形（単純形）だったものが、12世紀後半以降"ne…pas""ne…point""ne…mie"のような不変化辞を伴った複合的な否定形（複合形）が現れ始めた。それでも盛期古フランス語では単純形が多かったものの、中期フランス語になると、"ne…pas"の形が他よりも優勢になり、"ne…mie"は衰退した。その後次第に"ne…pas"と"ne…point"が競合するようになり、単純形もほぼ脱落した。そして近代フランス語では"ne…pas"が増え現在の形へとつながっているとのことである。言語の通時的変化を多くのデータに基づき実証的に論じた川口

氏の研究は、他の言語の研究方法にも多くのヒントを与えうるものであった。

大矢氏の講演は、ドイツ語のbekommen‘get’を用いた構文や「自由な与格」に受動と使役の両義性が認められる事実に着目し、この場合の使役の持つ意味について検討を行ったものである。講演ではまずbekommen‘get’構文に受動と使役の両義性が認められることを確認した上でbekommen‘get’自体には使役者の行為は含まれず、使役の事態であるには「変化（+結果）」のみ存在すればよく、使役主の行為は必ずしも必要ないのではないかという主張が述べられた。また、free dativeも受動と使役の２つの意味を表しうるという事実から大矢氏は、“unintentional causer”という概念を提起し、様々な関連する言語現象を説明している。中でも日本語との対照という観点で言えば、「母親が子供を死なせた」「太郎が野菜を腐らせた」「太郎が会社を倒産させた」のような構文の主語が“unintentional causer”に該当することを述べ、これらの構文中の「させる」は、「腐る」「死ぬ」のような語彙的他動詞を持たない自動詞を他動詞化する働きをしており、使役という語彙的意味を導入しているのではないという解釈を打ち出している。

最後に本学の風間伸次郎氏による発表「言語類型論からみた日本語―日本語は本当に従属部表示型の言語なのか？―」が行われた。風間氏の発表は、日本語が従属部表示型言語であるのかについて、（１）日本語の述語はかなりの場合は主語の人称を標示しているのではないか、（２）日本語の名詞は、本当に主格対格によって文法関係を標示しているのか、という２つの問題点に基づき、検証を行ったものである。（１）については、一見従属部表示型のように見える日本語であるものの、動詞の方にデフォルトの人称階層があり、反転のシステムが十分に用意されている点で、主要部表示型の言語の性格を備えていると見ることができると主張している。（２）については、口語における無助詞現象を取り上げ、日本語は口語では純粋な主格や対格は現れないことが多く、これは日本語が従属部に文法関係を示す標示を用いないことを意味するという点を指摘している。この点はさらに映画のシナリオを用いたパイロット調査による検証が加えられており、その結果、日本語における典型的な格標示として、主語や目的語は明示的な形式を持っておらず、他方では主語や目的語といった文法構造は、述語の相対的人称標示によって主に示されているという点が主張されている。

従って日本語、特に口語は、どちらかと言えばむしろ主要部表示型の言語であると見ることが可能であるという風間氏の主張は、言語類型論の枠組みの中における日本語の位置付けと合わせて考察された、強い説得力を持つものであった。（三宅登之）

July 12th, 2014 Lecturer:Toshiaki OHYA (University of Tsukuba)Speakers: Yuji KAWAGUCHI, Shinjiro KAZAMA (TUFS) The 13th Researh Seminar for Contrastive Study for Japanese and Other Languages was hosted by the International Center for Japanese Studies, Tokyo University of Foreign Studies. Yuji KAWAGUCHI examined the historical development of negative constructions in French. He explained, with the use of examples, each stage in the grammaticalization of the negative constructions found in old French. Toshiaki OYA focused on the ambiguity of structures using *bekommen* (German for 'get') or 'free datives', which allow passive and causative interpretations, and considered the meanings of the causative in such cases. Shinjiro KAZAMA questioned whether Japanese is a dependent-marking type language. He suggested that predicates in Japanese often mark the grammatical person of their subject, and questioned whether grammatical relationships between Japanese nouns were really marked by the nominative and accusative cases. (Takayuki MIYAKE)

公開研究会「紐帯としての日本語～「日本」を離れた日本語」報告
Open Seminar "Japanese-Language as a bond: Japanese Language used outside of Japan"

7月3日に社会言語部門の主催で「紐帯としての日本語～「日本」を離れた日本語」公開研究会を開いた。昨年度まで三年間、国際日本研究センターの教員が中心となって進めてきた科研プロジェクト『<紐帯としての日本語>日本人社会、日系コミュニティ、「日本語人」』（基盤(B) 23310176 研究代表者:野本京子センター長）の研究成果を報告することも目的としている。

一人目の報告者は降幡正志氏で、「インドネシアの新興産業都市における日本語・日本コミュニティ-首都ジャカルタ近郊チカラン市のケース」というタイトルで発表された。日系企業が数多く進出する産業団地で、日系企業への就職を目指して日本語教室に通う人々とその教室での様々な実践が詳しく報告された。チカランの日本語教室「AYUMI」は、本学卒業生の設立したもので、開設当初は日本語を教える「普通の」語学学校だったが、企業風土にあわせたビジネスマナーなどを教えるようになり、就職に有利なスキルを身につけることを学校の特徴としている。日本企業の求める人材像と現地の人々の求めるものに精通して初めて用意できるものであろう。

二人目の報告は河路由佳氏による『現代パラオにおける日本語-人々による日本語使用とその学習の諸相』であった。パラオはかつて日本統治を経験し、現代パラオ語の中には多くの日本語由来の語彙が含まれていることでも知られているが、いまも日本人に人気の観光地でもあり、日本との縁は浅からぬ国である。統治時代を経験した人々の、それを伝え聞いた継承言語としての、そして観光産業に従事する人々のもの、と様々な日本語の獲得と使用の事例が伝えられたが、中でも観光業に関わる人々の話し言葉に特化した日本語の獲得は印象的であった。

今回の報告は現地日本語社会の中でも「学習」や「獲得」に焦点が当てられたが、それぞれのニーズに合わせた目標や方法が見られ日本語教育研究はそれらバラエティに柔軟に対応する「謙虚さ」が必要だと考えさせられた。（前田達朗）

Lecturers: Masashi FURIHATA, Yuka KAWAJI, ICJS, TUFS. This Seminar is part of No.23310176 Scientific Research(B),Grants-in-Aid for Scientific Research<KAKENHI> report. On July 3rd, the Sociolinguistics Department of ICJS held an open seminar, with presentations from M. FURIHATA (TUFS Professor, Indonesian language) lectured "Japanese and Sunrise Industries in Indonesia: the Japanese Community in Cikarang, Jakarta". Other speaker, Y. KAWAJI (TUFS Professor, Japanese language education) presented "The Uses and Characteristics of Japanese in Modern-day Palau." In Cikarang, which is outlying city of Jakarta in Indonesia, the Japanese language school Ayumi, founded by a TUFS graduate, offers courses that also teach students about Japanese companies. In Palau, as well as influences dating back to the Japanese occupation, the tourist sector has seen a focus on the acquisition of spoken Japanese skills. Japanese language education needs to be receptive to the wide ranging needs of language learners. (Tatsuro MAEDA)

特任研究員ワークショップ報告　2014年7月17日（木）
Joint Researchers Workshop Report July 17th, 2014

公益財団法人博報堂児童教育振興会「第8回日本語海外研究者招聘事業」招聘研究者兼当センター特任研究員であるデディ・ステディ氏（インドネシア教育大学言語芸術教育学部日本語教育学科准教授）による研究発表をワークショップとして研究講義棟209教室にて開催した。

テーマは「日本語の受動文とインドネシア語の受動文との対照研究」。「受動文」イコール「受け身」イコール「れる／られる」と学習者に捉えられる傾向が強く、それゆえに生ずる誤りが、日本人インドネシア語学習者にもインドネシア人日本語学習者にも多く見られる。デディ氏は従前より「インドネシア人学習者に日本語の受動文をどのように教えるか」を「インドネシア語と日本語との対照の観点から」研究を行なっており、研究員として本学に１年間在籍する中で日本語の受動文の文型につき様々な観点から整理し分類を行ない、またインドネシア語の受動文との対照研究を進め、さらにはさまざまな文献資料の収集・分析に努めてきた。

ワークショップの参加者は30名ほどであったが、日本語教育関係者（インドネシア人留学生を含む）、インドネシア語教育関係者（インドネシア人教員を含む）、言語学研究者、インドネシア語学習者など多岐にわたった。ディスカッションでは、それぞれの立場から質問やコメントがなされた。以下にその一部を挙げる。

・日本語教育の現場における「れる／られる」の導入の しかた
・基本的な文型と複雑な文型との間における「れる／られる」使用の容認度の違い
・インドネシア語で「受動文」と呼ばれる文型の解釈
・口語体や文語体の違いを含めた幅広い文体に対する考慮の必要性

いわゆる受動文は、日本語研究や日本語教育においても、またインドネシア語研究やインドネシア語教育においても、非常に興味深く、かつ非常に難しいものである。デディ氏の研究は、こうした困難な文法項目の取り扱い方に関して基礎を築くという重要な意義を持っており、その点を改めて深く認識することのできた充実したワークショップとなった。（降幡正志）

Lecturer: Dedi Sutedi, associate professor at Indonesia University of Education, the guest researcher in the Hakuho Foundation's 8th International Joint Research Project, gave a presentation on "Contrastive Research into Passive Constructions in Japanese and Indonesian" . Language learners have a strong tendency to assume that "passive constructions" equate to "the passive form" and "-reru/-rareru". This often leads to errors by Japanese learners of Indonesian and vise versa. Professor Dedi has long been involved in contrastive research concerning the teaching of Japanese passive constructions to Indonesian learners, and has analyzed these constructions from a variety of perspectives, contrasting them with passive structures in Indonesian. The presentation affirmed the value of basic research into complex grammatical features.　(FURIHATA Masashi)

2014年度　活動報告（2014年６月～９月）　Activity Report (Jun. - Sep. 2014)

■講演会・ワークショップ等■

●**7月3日(木)社会言語部門主催講演会「紐帯としての日本語～『日本』を離れた日本語」** 河路由佳氏、降幡正志氏（東京外国語大学）

●**7月12日(土)対照日本語部門主催 『外国語と日本語との対照言語学的研究』第13回研究会** 大矢俊明氏（筑波大学）、川口裕司氏、風間伸次郎氏（東京外国語大学）

●**7月17日(木)国際日本研究センター主催 特任研究員ワークショップ「日本語の受身とインドネシア語の受身との対照研究」**デディ・ステディ氏 （インドネシア教育大学）

●**7月29日～8月1日(火～金)国際日本研究センター主催 夏季セミナー・サマースクール2014「言語・文学・社会―国際日本研究の試み」** 趙華敏氏（北京大学外国語学院）中国／徐一平氏(北京外国語大学)中国／范淑文氏(台湾大学)台湾／于乃明氏(政治大学)台湾／蕭幸君氏(東海大学)台湾／金鍾德氏（韓国外国語大学校）韓国／任榮哲氏（中央大学校）韓国／ﾀｻﾆｰ・ﾒｰﾀｰﾋﾟｽｲｯﾄ氏（タマサート大学）タイ／林明珠氏（シンガポール国立大学）シンガポール／村尾誠一氏、早津恵美子氏、高垣敏博氏、谷和明氏、野本京子氏、谷口龍子氏（東京外国語大学）

●**7月30・31日(水-木)14:20～ 国際日本研究センター主催 「サマースクール院生研究発表会」**北京大学、北京外国語大学、韓国外国語大学校、韓国中央大学校、国立台湾大学、国立政治大学、台湾東海大学、タマサート大学、シンガポール国立大学、筑波大学、東京学芸大学、国際基督教大学、東京外国語大学より院生47名発表

●**9月8日(月)国際日本語教育部門　主催 「日台体験型交流活動を通じた学びとは-母語・地域性をふまえた日本語教育研究」ワークショップ** 文野峯子氏（人間環境大学）、工藤節子氏（東海大学）台湾

■会議歴■

●**センター会議：** 2014年 6月12日、7月14日
●**部門会議：** 2014年9月17日

■ *Lectures and Workshops* ■

●***3 Jul.: Open Seminar "Japanese-Language as a bond: Japanese Language used outside of Japan"*** by Masashi FURIHATA, Yuka KAWAJI (TUFS)

●***12 Jul.: "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 13th Research Seminar*** by Toshiaki OHYA (University of Tsukuba), Yuji KAWAGUCHI, Shinjiro KAZAMA (TUFS)

●***17 Jul.: ICJS Joint Researchers Workshop"Contrastive Analysis of Japanese and Indonesian Passive Sentences"*** by Dedi Sutedi (Indonesia University of Education)

●***29 Jul.- 1 Aug.: Summer Seminar 2014 "Language, Literature, Society: Approach to a Construction of International Japanese Studies"*** by ZHAO Hua Min,Peking University; XU Yi Ping, Beijing Foreign Studies University; YU Nai Ming, National Chengchi University; CHEN Mung Tzu, Taiwan University; HSIAO Hsing Chun, Tunghai University; KIM Jong Duck, Hankuk University of Foreign Studies; YIM Young Choel, Chung-Ang University; Tasanee METHAPISIT, Thammasat University; LIM Beng Choo, National University of Singapore, Seiichi MURAO, Emiko HAYATSU, Toshihiro TAKAGAKI, Kazuaki TANI, Kyoko NOMOTO, Ryuko TANIGUCHI,Tokyo University for Foreign Studies(TUFS)

●***8 Sep.: Workshop "What is Learned through Experience-Exchange Activities on Japan and Taiwan"*** by Mineko BUNNO (University of Human Environments), Setsuko KUDO (Tunghai University, Taiwan)

■ *Meetings* ■

● ***Center meetings:*** 2014 - 12 Jun., 14 Jul.
● ***Division meetings:*** 2014 - 17 Sep.

■今後の活動予定■

●**10月15日(水)16:00-17:30(ポスター展:10/15－11/14 10:00-17:00、最終日は-12:00) 東京外国語大学2014年「V4＋日本」交流年事業実行委員会、国際日本研究センター主催、日本美術技術博物館manggha開館20周年記念「クラクフにおける日本のふるさと」国際シンポジウム、ポスター展** ボグナ・ジェフチャルク＝マイ氏（日本美術技術博物館manggha館長）、カタジナ・ノヴァク氏（同副館長）、加須屋明子氏（京都市立芸術大学）、スタニスワフ・メイエル氏（ヤギェロン大学/当センター特任研究員）、森田耕司氏（東京外国語大学）

●**10月30日(木)16:00-17:30 社会言語部門主催 講演会「紐帯としての日本語～『日本』を離れた日本語」**谷口龍子氏、友常勉氏（東京外国語大学）

■ *Future Events* ■

●***Wed.15 Oct.(pm)16:00-17:30 International Symposium "Japanese Home in Krakow"*** by Bogna Dziechciaruk-Maj,Katarzyna Nowak(the Museum of Japanese Art and Technology"Manggha")Akiko KASUYA(Kyoto City University of Arts)Stanislaw Meyer(Jagiellonian University / ICJS),Koji MORITA(TUFS)
Wed. 15 Oct.- Fri. 14 Nov.（10:00-17:00,Open for Weekdays）Poster Exhibition "Japanese Home in Krakow": the 20th Anniversary of Manggha Museum of Japanese Art and Technology in TUFS

●***Thu.30 Oct.(pm)16:00-17:30 Lecture "Japanese-Language as a bond: Japanese Language used outside of Japan"*** by Ryuko TANIGUCHI, Tsutomu TOMOTSUNE(ICJS)

発行　東京外国語大学国際日本研究センター　〒183-8534　東京都府中市朝日町3-11-1　アゴラ・グローバル2F
TEL　042-330-5794　E-mail info-icjs@tufs.ac.jp URL http://www.tufs.ac.jp/common/icjs